

大江健三郎『宙返り』における反復 — 象徴天皇制との関わりを視座として —

西岡 宇行

要旨

本論文は象徴天皇制との関わりを視座として大江健三郎の手による宗教共同体を扱った長篇小説『宙返り』(1999)を読み直し、この作品に、本論文が〈反復〉と名指す一連の再解釈行為を通じ、戦後の日本における個人と神との関わりへの不可能性をむしろ可能性の条件として文学を編みだす過程が開示されるさまを読みとった。また、その読みをもとにして、この小説と天皇制との関わりをみるにあたっては、王殺しという主題だけでなく、書き換え、書き直しを通じた王の書き継ぎもまた、検討されるべき重要な主題であることを指摘した。最後に、作品が発表された時点における同時代日本社会と天皇制との結びつきに作品がどう関わろうとしているかを示唆した。

キーワード: 大江健三郎, 『宙返り』, 宗教, 反復, 象徴天皇制

1. はじめに

日本国憲法第一条では天皇を「日本国民統合の象徴」としている。しかし、象徴であるとは具体的にはどのようなことか。

河西秀哉は憲法制定に向かう議論をたどった末、「象徴が明確に定義されなかった」¹とし、かつ現在においてもなお、未定義のままにとどまっていると述べる。赤坂憲雄もまた「象徴とは何か」という問いに対して「明確な答えは、どこにもない」とした上で、それを「文化・精神的な象徴の位相」に位置付けようとしてきた思想家らの営為を繙くが、最終的には「象徴天皇制にはそれをささえるシンボリックな基盤が存在しない。そこに、戦後の象徴天皇制をめぐるイデオロギーのもつ虚構性が、もっとも露わに覗けている」²とする。

作家・大江健三郎もまた、憲法第一条にある象徴という言葉の不分明さやその機能の不全に注目している。大江の論の特徴は自己の創作領域である文学一般の可能性と関わらせながら象徴についての考察を展開する³点にある。

大江の象徴に関する考えが述べられているのは「宗教的な想像力と文学的想像力」という評論である。ここで大江はまずユダヤ教神秘主義を学問的に研究した始祖としてそ

の名を知られるゲルショム・ショーレムが象徴について「偉大な象徴群は、かれの世界の統一を表現するのに役立つ」と述べていることに触れた上で、ショーレムがそれを述べた際に言及している「ダビデの星」というシンボルにまつわる死と再生に注目している。ダビデの星はもともとユダヤ人間で共有された象徴であったものの、大量虐殺の際ナチス・ドイツ側に逆用され、「絶滅とガス室にいたる道を現したしるし」ともなった。しかしショーレムによれば、そうした歴史を経てこそ、この象徴が「生命と再建の道を照しだす価値を持つにいたった」⁴という。

大江はそうしたショーレムの言を引き、以下のように述べる。

日本国憲法において、「象徴」という言葉は、このように切実な意味で使われているのではありません。しかもあの戦後、なお危機の続く時期に、その日本人の世界の統一を表現するにたる、それとは別の大いなる象徴が考えだされることもなかったのです。〔中略〕

象徴という言葉が、まともな意味をうしなっている言語世界があるとすれば、そこではやはりまともな宗教的想像力、文学的想像力は育ちにくいのではないか。⁵

ここで大江は象徴一般というよりは、危機の経験が託され、それゆえに再生への契機を持ち、再生の助けとなる象徴の不在を念頭においている⁶。戦前戦後の危機の中で、そうした象徴が作られてこなかったこと⁷は、大江にとって、戦後日本の言語空間における「文学的想像力」の可能性に制約を与えるものと受けとめられたのである。

以上のような評論を書くからには、大江の中に「象徴という言葉が、まともな意味をうしなっている言語世界」でどのような文学が可能かという問いがあったと考えられる。そして、この評論を発表した時期に大江が執筆中であった『宙返り』（1999年）⁸はこの問いに取り組もうとしたものと捉えられる。

『宙返り』はある新興宗教教団の一旦の解体と再出発を描いた作品である。かつて教団の教祖たる師匠と名指される人物は、教団内急進派のテロリズムを阻止すべく教祖たる立場の前提となっていた自己と神とのつながりを否定し、それまで述べてきたことが神による支えを持たないものだったと宣言した。「宙返り」と呼ばれるこの宣言は、師匠が自己の述べてきた教義を全的に否定する性格を持つもので、この宣言以降教団は活動を休止することになる（以下、本論文でもこの宣言を基本的に「宙返り」と呼ぶこととする）。その後10年が経ち、師匠は再び宗教活動をはじめようとする。集まった賛同者らの手によって成った教団は、四国の村の谷間に本拠を構え、師匠自身が焼死する儀式めいたパフォーマンスを通じて、旧教祖たる師匠不在となった地点から本格的に新規の活動をはじめていくことになる。

『宙返り』には上の評論とそこで提示された象徴天皇制と文学との関係を明示的に意

識しているとみられる箇所が複数見出せる。第一に上で言及した評論で大江がショーレムから引いた部分が直接的に参照され、作中の教団の中心人物らの企図を解釈する枠組みが与えられていること⁹。第二に教祖の「宙返り」に天皇の「人間宣言」が託されていること。象徴天皇制の前提には神たる天皇の「人間」化である人間宣言があったことは周知のとおりである。したがってこれもまた、象徴天皇制を意識した要素であると言えるだろう¹⁰。第三に小説内にこの小説そのものが書かれるにいたる過程が内包されていること。それはこの作品が評論で述べたような想像力の状況下における文学存立の機制を開示し、もってその可能性を問おうとしていることを示しているだろう。

以上をもとに本論文は「象徴という言葉が、まともな意味をうしなっている言語世界」でどのような文学が可能かという問いに応接した作品として『宙返り』を読み直すことを試みる。

なお、ここで作品とオウム真理教事件との関わりについて触れておきたい。大江自身がその執筆動機をオウム真理教事件との関わりから説明しているため¹¹、この作品を同時代状況との関わりから読む際には、オウム事件がまず参照項目として挙げられるところであろう。それでは、本論文が象徴天皇制との関わりから作品を読むことは、オウム事件との関わりから読むこととどのような関係にあるのだろうか。

これについて述べる前提として、まず確認しておきたいのは、象徴天皇制に起因する同時代日本の想像力の状況が、オウム事件の背景をなしているという認識である。大江においてオウム事件にみられたようなテロリズムとは「現代社会を生きることの不安、不満、孤立感」に駆り立てられた若者らが、それを乗り越える共同体を作ろうとするも、本来そのかすがいとなる宗教的・文学的想像力を持つことがないため、内部の緊張感を維持するために作り出してしまう物語が招くものだった¹²。

本論が試みる読みは、したがって、オウム真理教事件という象徴天皇制よりも強く作品と結びついていると思しき状況を参照した読みをより広い文脈から位置付け、かつ精緻化する際の足掛かりとなる。先行研究に則して具体的に述べよう。尾崎真理子はオウム真理教事件を参照項目としながら『宙返り』を読み、指導者なきあとのオウム真理教の信者や、より広く新興宗教を求めてしまう若者らに向けて「神なき時代の、人間の想像力による神話の創造」¹³の可能性を提示することを作品の主題として見ている。対して本論文は以下、尾崎の言葉に引き付けてまとめるなら、神的なものの不在にあたってなお神的なものを求めることを通じて共同的な物語が創造されていくことの機制を問うものとしてのテキストのありようを示す。

読解にあたって、本論文は以下の二点を主要な着眼点として読みを進め、上に提示した問いと作品との関係につき、導きだせる限りの知見を供給する。

第一の着眼点は、象徴の機能不全である。大江は戦後日本の言語空間における象徴の機能不全を憂えていたが、だからといって象徴を改めて作ったり、再起しようとしたり

したわけではないというのが本論文の見方である。象徴が機能しない状況を所与のものとして、そこから自己のモチーフを紡ぎだしていると考えられる。この着眼点については次章でも補足する。

第二の着眼点は上で触れた小説家小説的機構である。作中で書かれつつある「教会の歴史」が『宙返り』というテキストそのものであるというように、物語内容の時間と物語行為の時間との間に連続性を見出す読みが先行研究によって試みられている¹⁴。この読みにしたがえば『宙返り』はそれ自身が生まれてくる過程が含みこまれた小説であるということになる。しかしこうした成立過程の開示という意匠が作品の主題やその主題と同時代の状況との関係からどう位置づけられるのか明らかになってこなかった。本論文はこの方法が象徴天皇制下での文学のありうる一つの形態を構成する要素であると主張したい。

次に、以上のような本論文の視座は大江健三郎研究の潮流との関係からどのように位置づけられるかを述べておく。

大江健三郎の作品にしばしば天皇制への言及がみられることはよく知られており、作品論ベースでこうした大江文学と天皇制に着目した先行研究は多くある¹⁵。こうした先行研究はこれまで60-70年代の小説群を対象としたものに集中していた。しかし近年『宙返り』とは発表された時期的にも主題的にも近い『燃えあがる緑の木』（1993～1995年）についても天皇制との関わりを示す読みが提出されてきている¹⁶。

それらの研究のうち、本論文と同じように語りに着目するものは——それはいまだ、60-70年代の小説群を対象としたものに限定されるが——天皇制下で制限を被ったり毀損されたりした言語により語りかつ書くことの不可能性に直面し、それを乗り越えていく方向性を示すテキストのありようを示してきた。天皇制のもとでの言語・文学の可能性／不可能性を大江作品に求めようとする点で、本論文もここに連なる。

他方で、これらの研究においては、80年代以降に大江が試みた、テキスト内に内包された作者像の前景化が、天皇制と大江文学との関わりにおいてどのような役割を果たしているのか、明らかにされてこなかった。本論文はこれに資するものとなる。

それでは、こと『宙返り』と天皇制の関わりについて具体的に言及した先行論と本論文とはどのように関係しているか。管見の限り『宙返り』と天皇制の関わりについて言及しているのは結秀実の論考のみと思われる。結は大江健三郎文学における〈父の不在〉に着目し、ここに〈王殺しの不徹底〉——天皇（王）制が戦後もあいまいな形で残存し続けていること——が仮託されているとする。そして、この〈王殺しの不徹底〉から派生して表れる〈狂気〉——すでに不在となってしまったためもはや王を殺し得ないことから来る狂気——のモチーフと〈救済〉——王=法の不在状況を整序し統一しようとする欲望——のモチーフによって大江文学を一望する視座を供給した上で、『宙返り』を〈救済〉のモチーフが色濃くみられる作品と位置付ける¹⁷。

対して本論文は結が見出した〈王殺しの不徹底〉の主題の前提となっている王殺しの徹底を是とする天皇制に対する関わり方とは異なる天皇制との関わり方を作品が提示している可能性を示唆したい。第4節でこの点について論述する。

2. 象徴の機能不全と反復

前節でとりあげた評論で大江が参照していたのはゲルショム・ショーレムがユダヤ教神秘主義における象徴について述べている箇所であった。ユダヤ教神秘主義における象徴概念でとりわけ重要なのは、それが、個人の神秘的な体験を表現する際に不可避に介入する、ある共同体の歴史の中で成った言語的装置とされている点である。この背景には、神的なものと人間的なものとを媒介するものとして言語を捉える見方がある¹⁸。

ショーレムが象徴について述べた箇所を持ち出す以上、大江はこの点を意識していたと考えられる。したがって、作中の登場人物により「人間宣言」した天皇＝象徴としての規定が与えられる教祖・師匠やそれをよすがとして神とつながろうとする信者が、神秘体験をうまく言語化できず、また肝心なところで神秘体験を迎えられず、右往左往するさまが描かれているのもまた意図的なことだっただろう。「信仰を持たない者の祈り」¹⁹などのフレーズに代表されるように大江が80年代以降一貫して神を信じられない自己のありようを開示してきたことも考えあわせれば、常に正しく機能する象徴がありうるという前提で創作が行われていないと考えるのが妥当である。そうでなしに、象徴としての役割を果たし得ない師匠をめぐるいかに「文学的想像力」が可能かということに取り組もうとしていると言えるだろう。

それゆえ、注目すべきは、象徴の機能不全により起きる葛藤、すなわち神との接続の不可能性がどのように描かれているかということであり、かつその葛藤から導き出されるモチーフが最終的にいかなる文学のありように通じているかであろう。本節では第一段階として神との接続不可能性が描かれる場面に、反復することに密接にかかわる特徴的な一連の再解釈行為を見出し、これを仮に〈反復〉と名指す。

しかし、なぜここで反復に注目するのだろうか。それは、大江の「文学的想像力」の定位に関係している。再び第1節で言及した評論に立ち戻ってみたい。ここで大江は死と再生に着目しながら「文学的想像力」について例示している。

他方、異端とされた人たちを代表する者としてペイゲルス教授が語られるのは、グノーシス主義のキリスト教徒についてです。かれらのなかには、復活についての文字通りの見方を愚か者たちの信仰と呼ぶ、過激な人たちもいたようです。

《復活は、過去における単一な出来事ではなかった、とかれらは主張した。そのかわりに、キリストの実在が現在においていかに経験されうるかをそれは象徴化したのであり、問題であるのは、文字通りに見えることではなく、霊的なヴィジョンな

のであると。》

この考え方は、文学的想像力に近いものに思われます。²⁰

ここからは、「文学的想像力」が、見かけ上単一と思われる過去の出来事を、繰り返し現在に立ち現れる出来事として再解釈しようとする想像力のことであり、象徴を象徴として受けとめる力でもあると読み取られる。こうした想像力にはセーレン・キルケゴールの言う反復との共通性がみられるだろう。キルケゴールは『哲学的断片』の中で、キリスト教においてイエスという過ぎ去った瞬間は可能性として残り続けており、後世の者は瞬間が可能なものから現実のものへと生成した過程を反復することで、現在時に瞬間を受け取りなおすことができるとしていた²¹。すなわち反復は、信仰する現在において神的なものとの接続を担保する方途である。大江にとって象徴不在の場での「文学的想像力」の可能性を問うことは、戦後日本において神との関りからいかなる反復がありうるかを問うことでもあった。

まずは、本作の主要登場人物である育雄の神との関わりを検討する。家族の仕事の関係で幼少期にアメリカに住んでいた育雄は、10歳で帰国したのち、英語力維持の目的で、家族ぐるみで付き合いのあった出版社経営者のアメリカ人・シュミットの家毎週末泊まりこみをしていた。14歳まで続いたこうした生活の中で育雄はシュミットとの同性愛的関係に陥り、性的な虐待を受けるようになる。とある日、育雄は「ヤレ！」という「自分のものでない声」がこだまするのを聞き、その声に従う形でシュミットを暖炉の火掻棒で殴ってしまう。周囲の働きかけからこの傷害事件に対して法的な処置を受けることなく、シュミットとの関係はもとに戻ったが、その二年後、16歳時にシュミットの出張に同行を求められた育雄は、途上のホテルで今度は彼を撲殺することになった。しかし、二度目の暴力性を発揮した撲殺について、育雄には自分の行為ながら不明瞭な点があり、それが再度の神の聲の到来を希求して師匠に近づくきっかけとなった。

育雄を直接撲殺に駆り立てたのは、育雄の語りの中では「電気」とされている。「電気」は、シュミットから受け取った言葉である。シュミットは自分の故郷を素描した絵を参照しつつ、ホテルから遠望できる実際の故郷の土地について「自分の両親は[中略]今あそこにみなぎっている「電気」を、全身に感じとりながら育ったのだ」「ヨーロッパから新大陸に渡った人間にとって、この風土はそのようなものだ」[下、220]と育雄に伝えた。この言葉に影響を受けて育雄は「自分の魂も荷電している」「高圧の「電気」をみなぎらせ燐光を発している私自身が見え」[同上]と感じた。そして、第一の傷害事件の際に「ヤレ！」という声が聞こえていたことを思い出し、「その声を聞きながら、自分には勇気がなくて、しまいまでやりとおせなかった[撲殺までいかなかった、という意味か]」[下、221]という後悔に襲われる。続けて「電気」が頭の中に起こすジンジンとした音に「ヤレ！」の「残響」を感じとった育雄は、撲殺に及んだ²²。

事件の処理は専門家らの手にゆだねられ、「性的ハラスメントの憐れな被害者」が「防衛的な暴力をふるうほかなかった」〔下、223〕という線で処理された。聴取を受ける育雄自身も、その方向で処理されるように仕向け、「ヤレ！」という声については触れずに精一杯「あれをやる積極的な動機はない受動的な子供」の演じものをした。しかしそれによって育雄は「急場造りの鋳型に自分から入り込んで」しまったために、「なけなしの自分の経験」を手放してしまったと感じている。以降、育雄は声の主を見失い、声が聞こえなくなってしまった。

この育雄の語りの中で、注目したいのは、「ヤレ！」という声が聞こえたことについて、確信を持ってない思いを吐露した一節である。

実際にやり始めさえすればジンジンは消えて、あのとき〔一度目に暴力を振ったとき〕聞こえたヤレ！ という声ひとつになると思ったのだったか？ しかし火搔棒を振るいながら、耳を澄ませていたわけではありません。次にその声のことを頭に浮べたのは、ふたりの教授たちの質問に答えているときでした。今度こそしっかりやったのだから、自分はヤレ！ という声そのものだったのだ、と考えたのです。それでも、今度は聞こえなかったのじゃないか、という思いが浮かぶのを振じ伏せてのことでした。〔下、222-223〕

引用部にあるようにもし声が聞こえていなかったのだとしたら、声を根拠に撲殺の「積極的な動機」を語ろうとするこの体験談の企図はついでに、「防衛的な暴力をふるうほかなかった」というナラティブに回収されてしまう。したがって、「今度は聞こえなかったのじゃないか」という部分は言及しない方がよかったように思われる。しかし、こうした反復からのずれの可能性こそが、むしろ育雄による自己の経験の捉え返しの独特さを際立たせていることに注意を促しておきたい。もし声が聞こえていなかったとしても、「自分はヤレ！ という声そのものだったのだ、と考えた」ことはなかったことにはならない。事実としての反復性よりも、反復の中に自分の行為があると信じること、すなわち、反復からずれてあることの可能性および現にあるずれを引き受けた上で自覚的に選び取った反復——この意味での反復を、以下〈反復〉と表記する——が、ここで育雄の言う「積極的な動機」であり、「なけなしの自分の経験」であると考えられる。

作品の最重要事件である師匠の「宙返り」もまた、こうした意味での〈反復〉との関係からありえたことだった点は注目に値する²³。

「宙返り」せざるを得なくなったのは当時の教団内急進派による原発テロ計画が進行していたからだが、この計画は、師匠が、「悔い改めに逆らう者らと戦え」〔下、54〕という神の声を聞いたと伝えたことをもとにしていた。そして、この神の声の出所に〈反

復)がかかわっている。当時教団内急進派はテロリズム的行動を促す神の声を待っていた。しかし、一向にそうした神の声は聞こえてこない。そこで師匠はそうした声を聞くための瞑想が「自分にやって来たという演技をした」という。ただし、完全に演技だと思っていたわけではない。

まず私は、それまで多年にわたる経験と同じ瞑想を、ただ今回は意識的に呼びよせたのだ、と考えていたのです。事実、そのために心の力をつくしていました。私が向こう側に行く際、その前に立つ超越的なものに対して、いま自分は問いかけるのだと考え、そしてその問いかけに帰って来る答えに耳を澄まして、私は自分の作りだした瞑想の時を過ぎたのです。しかも私は実際に答えを聞きとることができた、と信じるようでもあったのです。[下、53]

師匠は「同じ瞑想」を意識的に起こしたと考えている。しかし、ここにいたるまで、冥想については、基本的に向こう側から不可避に連れていかれてしまう経験として描写されていた。神とつながる経験は、個人の側から引き起こし得ないことが前提になっていたはずで、それを意識的に呼びよせることが難しいことは師匠にも意識されていたと考えるのが妥当である。ここには、やはり反復からずれてあることの可能性を引き受けた上で自覚的に選び取った反復としての〈反復〉が読み取れるだろう。神の声との接続可能性を模索する育雄が、神の声を聞いたことを否定する「宙返り」を行った師匠を頼ったのは、このような〈反復〉に向かう共通性であり、また、自分も師匠も〈反復〉の起源となる何らかの出来事と直面してしまった経験を有するという共通性であった。

次節では〈反復〉が複数性に開かれるありようをみていきたい。

3. 〈反復〉の後押し

新しい教会の発足をマスメディアに広く周知するための「夏の集会」において、師匠は、演説を打ったのちに焼死することになる。この集会での一連の出来事の中で師匠の〈反復〉と育雄の〈反復〉とが双方ともに肯定されることになる。しかしその肯定は〈反復〉が確かに起源の出来事の反復であったということの肯定ではない。まずは師匠の〈反復〉についてみておこう。師匠は育雄との神の実在性をめぐる想像上の対話について、以下のように述べる。

よな [育雄の教団内での通称の一つ] は、この問いかけにまずショックを受けたはずです。それでも、よなは敢然と言い返したでしょう。師匠は「宙返り」によって神をコケにした。実在しないものをコケにできるだろうか？ あなたたちですら「宙返り」をやってコケにするほかなかったということが、神が逃れようなくあな

たたちに顛れた証拠だと思う。師匠はテレヴィのカメラに向けて「宙返り」の際にその身ぶりをしたが、それは視聴者に対してより実在する神に向けてこそそうしないではいられなかったのだ……

よなのポジティブな問いかけに発して、考えることを重ねた後、いま私は自分があの窮境において、実在しながら沈黙している神を、しかも確かにこちらを見張っている神を、コケにしたのだと認めます。そうであるからこそ、「宙返り」の後に地獄降りが待っていたのです。私と案内人が「宙返り」によって向こう側と無縁になれていたのなら、どうして私らが地獄を体験しなければならなかったでしょう？

[下、438-440]

ここでは、〈反復〉を否定すること＝「宙返り」が、〈反復〉が反復でありえた状況（「実在しながら沈黙している神」が「こちらを見張っている」のだから、瞑想の中で神との接続がありえた）の実在を示しているという逆説的な論建てがなされている。もって見出された、否定されるものとして現れる神の様態には、神の実在を現在時において経験する方途としての反復（キルケゴール）からずれる、〈反復〉が複数の者を経由したことで抱えた屈折が書きこまれていると言えるだろう。

師匠はこれを受け入れることで、自己の〈反復〉に含まれた真実性——反復に通じる要素——を認める一方でそれを否定するという相互に矛盾した行為を行うことが可能になっている。師匠が言うように、もし育雄の呼びかけをきっかけに師匠が「考えることを重ねた後」「神を、コケにしたのだ」と認めるにいたったのだとすれば、師匠が遡行的に見出した「神」は、反復される単一性としての神ではなく師匠のずれやそのずれを肯定する育雄を介してこそ見出されえた、〈反復〉の中の書き替えられた〈神〉のありようではなかったか。

そして、引用部にあるように、この育雄の呼びかけは師匠の「想像」の中で行われていることに注意を促したい。自らの〈反復〉の真実性——撲殺の際も神の声を聞き得たこと——を証するために自分のもとに現れた育雄を通じて師匠は自分自身の〈反復〉の真実性を認め、かつそれを通じて神の実在というビジョンを示すことで、育雄の〈反復〉も後押ししようとしている。ここには相互主観的關係の中で〈反復〉の真実性を認め合うありようがみられる。

また育雄の〈反復〉は踊り子との関係でも肯定される。パフォーマンス中で焼死することになっていた師匠に対する火つけ役を任された育雄は、しかし、躊躇いを見せる。踊り子はその理由を「ヤレ！」という声が聞こえないことと受け取り、以下のように言葉をかけたことを荻に語る。

——やりなさいよ、といったのね！ と怒りを発している少女めいた強い調子で。

いつも偉そうに、ヤレ！ という声が聞こえればやる、そういったたでしょう？
いま、ヤレ！ という声が聞こえないの？ そういったのね！ もし聞こえなくても、やっちゃってから、ヤレ！ といわれたと言いき張ればいいじゃないの！ そういったのね、私！ [下、438-440]

ここで踊り子は「もし聞こえなくても」「言い張」ること——〈反復〉——を後押ししようとしている。これは箇所としては遠いが育雄がシュミットを撲殺した時のこともまた、反復であったかは不明であるが、〈反復〉であったと主張することで、自己に固有の経験を擁護する積極性の発揮を後押ししている。これは神の声のせいにして責任を放棄することを唆すのではなく、育雄の中のあるべき世界秩序に沿って責任を引き受けることの要請であろう。そして、上で述べたように、師匠が育雄との関係から〈神〉を見出した以上、ここでその声を聞くことは、単に育雄だけの問題ではなくなっている。

この言葉をもとにして育雄は師匠自死の幫助を成し遂げ、その直後、踊り子を「抱きとめ」[下、447] ことになる。育雄と踊り子との親密さがこの箇所で開催されるのは唐突に思われるが作品が〈反復〉の支援にこそ人と人との間の紐帯がありうると示そうとしていることは確かだろう。

「夏の集会」の師匠自死にいたる計画は作中で詳述されていない。辛うじてそれが育雄や萩、そして踊り子らによって多かれ少なかれ師匠ぐるみで事前に計画されたものだということが推測されるだけである。書かれていないことについてこれ以上の解釈は控えるが、「集会」を通じて、複数の〈反復〉を相互に引き受け合い後押しし合うことが、唯一神が不在の宗教共同体において、集う人々の実存を支え合い次につなげていくことのありようなのだということが示されていると言えるだろう。

それでは、作中におけるあらゆる〈反復〉が相互に肯定されえているとは言えない点についてはどのように捉えればよいのだろうか。たとえば教団内急進派の原発テロ計画もまた言い張ることに発している²⁴という点で、〈反復〉に数えられる。作品中で最も重要と言ってもよいこの〈反復〉は師匠が「宙返り」によりその行動を封じようとしたことで否定されたように見受けられる。

しかし、これについても作品はその肯定に向けた方向性を示していると考えられる。急進派の流れを受けたギーの千年王国について、育雄はこれを否定せず、随行する覚悟を見せているのであって、師匠に不可能だった行為——神を後ろ盾とした暴力に通ずる〈反復〉を引き受けること——の可能性が教団の次世代を作るであろう育雄に見出されているととることができる。実際、神の声にしたがってシュミットを撲殺したという〈反復〉を後押しされた育雄は、終結部にいたって、「神の声は、イラナイ」という結論に賛同し、神を後ろ盾とする暴力から自分自身を引きはがそうとしているように描かれるわけで、これがありうるのであれば、自己の〈反復〉がそのままの形で後押しされるこ

とを通じて逆説的にも各々が〈反復〉を超え出る道もあることになるだろう。そしてこうした道が託されていたのが、否定されるべきものとして見出される〈神〉ではなかったか。

次節ではこうした共同的な〈反復〉が書く過程と関わっているさまをみる。

4. 集団創作の方向性

作品終結部では焦点化人物の一人である荻が「教会の歴史」（「同時代史」とも言われる。〔下、462〕）を教会に関わった各登場人物とともに書き継いでいくありようが提示される。育雄の手紙や木津の覚書を受け取って荻がまとめ、それをさらに育雄が読んだ上で書き直しが行われるなどのプロセスにも言及がある（〔下、457〕）。第1節で述べたように、本論文はここで書かれている作品が『宙返り』自体であることを前提に以下読解を進める。

「夏の集会」から一年後、それまでの「教会の歴史」を書き継ぐ荻や育雄らの様子が描かれる終章「永遠の一年」で、育雄が神の声と決別する場面に、創作者らの書くことにまつわる物語が物語内容との関わりから読み取られると考えられる。以下は、同性愛関係にある育雄のパートナーであり、元の案内人が死んだ後に新たな案内人として指名された木津の、死の直前の台詞である。

——育雄、ヤハリ、神ノ声ガ聞コエナクテハ、イケナイカネ？ 神の声は、イラナイノジャンイカ？ 〔①〕 人間は、自由デアル方ガ、イイヨ。〔②〕

育雄には、思いつきなりと答えることができなかった。それでも硝子窓の向こうの黒い湖面を覆う淡い闇が、浮びあがり浸透してくる具合に、暗いなりに柔い感情が身中に瀰漫した。

——アレガ……ソウイッタトイウガ、オレハ、神ナシデモ、rejoice トイウヨ。自分ニ、マタ……〔下、476〕

この場面で死にかけた木津の言葉は健常者のそれとの音声的な異質性を強調するためか表音性の高いカタカナで記述されている。しかし、下線を付した部分はひらがなとなっている。ひらがながカタカナと比べ相対的に書き言葉で用いられる頻度が高いことを考慮に入れるのならば、下線部分については実際に話されたものではなく、書かれた言葉であることが強調されていると言えるだろう。

これまで述べてきたように多くの人の体験談をもとに『宙返り』が編集を介してまとめられる過程が作品内随所に散見されることを踏まえれば、下線部分は、編集を行った人物らがこの場面のもととなる経験を伝えた育雄の語りに補足的に入れた言葉と考えてもよいのではないだろうか。

①の主語が「神の声」であることは文法的に自明であるため木津はわざわざ言わなかったものと思われるが、編集者らは冗語に思われようとこれを入れたかったようである。他方②の「人間は」の方は①の主語と事情が異なり文法的には自明ではない。『宙返り』でここまで神と人間との対立が強調されてきたことを踏まえた主語ではあるが、これが欠落していた場合、読み手がすぐに「人間は」という主語を埋められるとまでは言えない。たとえば育雄に向けた個人的なメッセージであることを踏まえれば「君は」「育雄は」なども選択肢に入る。

①と②の主語の補完からは教会史を書く荻、踊り子、そしてこの体験を手紙の形で荻に伝えた育雄による解釈の方向付けがみてとれる。これが「教会の歴史」としての『宙返り』終結部に置かれていることを踏まえれば、ここからみられるのは木津の言葉を神と人間との対立という大きな問題に対する、教会が差し出す回答としようとする方向付けである。

これを踏まえるようにして、直後で育雄は教会の定義を行う。やや長く引用する。

——ここに半年、さらに暮して……夏の集会以来、永い一年でした。それでよく考えることができたと思いますが、私はあの人の言葉 [前の引用部の木津の言葉] に同意しています。

師匠は、ギーがいま惹きつけられている「千年王国」的な構想ですが、反キリストとして教会を主宰するといっていました。私は自由になった人間として、ギーが「新しい人」の教会を継ぐまで傍にいてやろう、と思っています。

——ギーは、確かに「新しい人」となりうる若者かも知れないが、私には神を信じることも、反キリストの側だともいわなかったなあ、といってから、フレッドはノートを閉じて穏やかに質ねた。ここは、神のいない教会となったのですか？

[中略]

育雄はいった。

——教会という言葉は、私らの定義で、魂のことをする場所のことです。 [下、477]

この引用部では育雄の中で教会の定義から「神」が外れる過程が示されている。「神の声は、イラナイ」とする前の引用部の木津の言葉に「同意」した育雄はそれを踏まえてフレッドの質問に答える過程で、今や「神の声は、イラナイ」ということが「私」だけでなく「私ら」共通の見解となっていることを認識したようである。そこで育雄は、「私ら」の見解としての教会の新しい定義を導き出す。

注目したいのは、第一に神との接続を断ち切る「神の声は、イラナイ」という言葉を手掛かりにした思考を通じて育雄の個人的なものであるはずの定義がはっきり確信を持って「私ら」の定義として提示される、共同性の芽生えが描出されていることである。

第二に、それが、「神の声は、イラナイ」という編集された言葉に端を発していることである。ここからは、育雄における個人的な共同性の芽生えを「教会の歴史」として寓話的に——一人育雄の気づきではなく、教会の起源として——提示しようとする複数の編集者らの意図が読み取られる。編集者らはこれにより、「教会の歴史」が複数の〈反復〉としてあること、また、そのような〈反復〉の連なりあい「教会の歴史」そのものであることを示しているのではないだろうか。

そして、作中で書かれる「教会の歴史」が読者が手に取る『宙返り』であるのだとすれば、『宙返り』は、象徴天皇制下の戦後の日本においてありえる「文学的想像力」としての〈反復〉に関わって文学が生まれる過程を開示することを試みた作品ということになるだろう。

以上、テキストに、内包された作者の複数が行う執筆・編集の過程が織り込まれているさまを考慮にいれた読解を行ってきた。ここで冒頭の結による先行論を本論文がここまで論じてきたことをもとに検討したい。

結はそれが遂行されるかどうかはともかく〈王殺し〉という主題に関わり続けることが大江の面目と評価している。しかし『宙返り』をみる限り王の神性を支える神は「コケ」にされたり「イラナイ」と言われたりはその「実在」は前節で述べたように逆説的な形であれ見出されるし、これへの信仰も決して根絶されるわけではない。神の媒介であり、部分によっては天皇の像が託される師匠は自死しはするものの、ギーに神性を引き継ぐような儀式を行って死ぬ上、そのギーは「千年王国」の建設をめざすというように、新たな王になっていく可能性が残されたまま終わる。これらの要素から、大江が王を殺そうとしているという前提で『宙返り』を読むことは妥当ではないと考えられる。

しかしこれは無論戦前戦中の天皇像に重なるような、単一の全体性としての〈王〉の復古を目指すということでもない。師匠が育雄との関係から神と自己との接続を再び見出した直後に自死したように、神を必要としない世界に向けて出発するための〈神〉を共同的なものとしてあらしめ、そうした〈神〉の出来を「歴史」として書き継ぐこと、書き継ぐことを通じて神を必要としない世界に向けての出発を〈反復〉し続けることが、この作品の提示する日本においてありうる神と個人との関係であり、また、そこに象徴天皇制下での文学のありようが託されているのであろう。

5. 『宙返り』と「人間宣言」

ここまで示してきたように、『宙返り』がそれ自体象徴天皇制下での文学の可能性を提示する試みであったとして、なぜそれは90年代の終わりに書かれたのだろうか。最後に『宙返り』が書かれた時点の象徴天皇制を取り巻く状況と作品との関わりを示唆して以上の読みの正当性を補強するとともにその含意するものの射程を示しておきたい。

第1節で触れたように「宙返り」には「人間宣言」が託されている。それは教団内の女性信者が師匠の「宙返り」について「それこそ師匠の「人間宣言」ということではなかったでしょうか？」[上、368]と述べている点に明らかである。

この一節に導かれ、今日「人間宣言」と呼ばれる1946年1月1日『官報號外』にて発せられた詔書に目を向けると、このテキスト中に「人間」という言葉が現れていないことに気づかされる。『號外』編集者らによってこれに「人間宣言」という題目が付されているということもない²⁵。本文中で天皇が自らの神性を「架空ナル観念」としていることは、事実である。しかし島薮進によれば、詔書は「明治天皇が神前で誓った五箇条の御誓文が引かれていて、一定の範囲で神聖性を保つような文言になっている」。天皇の神性が本当に「人間宣言」により否定されたのかという点は、『宙返り』中でも問われている。それは、上の引用部に続く「天皇様は確かにあの時「人間宣言」をなされたけれども、この国で、この国の人間の心で、天皇様のことはなにも変りはしなかったのじゃないか」という記述から読み取られる。

それを踏まえた上で、島薮は「人間宣言」について「「天皇の人間宣言」は天皇個人の意思表示にすぎず、法的拘束力のある文書ではない」こと、人間としての天皇のありようを「確認することは戦後の日本国民にとっての課題として持ち越された」と述べる²⁶。これを加味すれば、詔書に「人間」の名を冠すのはそれ自体、本論文の言葉で言えばその名を与える表現者の解釈が含まれる〈反復〉と捉えられる。象徴天皇制はこうした〈反復〉に下支えされており、島薮の言うように、この〈反復〉を言い張ることは戦後を生きる人々の課題である。

しかし、90年代後半の状況を見ると、この〈反復〉を継続することについて懸念を抱かざるを得ない状況が生じていたことが確認される。

まず前提として確認したいのは、90年代が、アジア・太平洋戦争の戦後処理に関わる転換点としてあったということである。冷戦体制の一応の終結は、その中にある限り問うことを留保されていたアジアへの加害責任の問題を浮き彫りにした。終わったと思われていた戦争に起因する諸問題は、むしろこの時期にその全貌を現したとすら言いうる。平石直昭はこうした事情を朝日新聞1994年12月7日朝刊社説の象徴的な題「「戦後」がやっと始まった」に触れつつ述べた上で、バブル経済の崩壊による経済大国としての日本の陰りも相まって、この時期日本はナショナル・アイデンティティ喪失の状況にあったと指摘する²⁷。

『宙返り』が書かれた90年代後半は、この改めての戦後に呼応する形で、反動的・復古的な運動が目立っていた。「新しい歴史教科書をつくる会」(1997年結成)の運動や、国旗・国家法の制定(1999年公布・施行)はこうした動きの中に位置付けられる。これらの動きを大江は、アジア・太平洋戦争終結以来の焼け跡からの回復の上に立って構築された戦後民主主義を破壊する動きと受けとめていた²⁸。

そして、これらの動きの復古性は、森喜朗の「日本の国、天皇を中心としている神の国」のような、人間宣言した天皇に改めて神性を見出そうとする発言がなされる土壌を作り出したのだった。

こうした文脈との関係から考えるのなら、「人間宣言」と同じく「人間」という言葉を木津の言葉に編集に関わった複数の登場人物が付け加えることにより神を必要としない新たな共同体としての教会組織を出発せよとする『宙返り』には、戦後民主主義の出発点の一つを形づくる天皇＝「人間」という図式を、改めてはじまる「戦後」において〈反復〉する試みが託されていると読めるのではないだろうか。

6. おわりに

本論文は象徴天皇制との関わりという視座から大江の『宙返り』を読み直し、象徴天皇制下での文学の可能性という日本戦後文学史を語る上での主題の一つに『宙返り』という作品から可能な範囲でアプローチした。先行する大江研究および作品論との関わりで言えば、第一にこの試みを通じて作品をこれまでに省みられてこなかった、しかし重要と思われる文脈に位置付けなおしたこと、第二に結果する読みから大江と天皇制の関わりについて、これまでと異なる見方を提案したこと、以上二点が本論文の貢献である。

註

- 1 河西秀哉『「象徴天皇」の戦後史』、講談社選書メチエ、2010年、8頁。
- 2 赤坂憲雄『象徴天皇という物語』、岩波現代文庫、2019年、223頁。初版：筑摩書房、1990年。
- 3 憲法制定当時の憲法問題調査会委員長であった松本烝治が象徴につき「文学書みたようなことが書いてある」と述べていたことに宮澤隆義が注意を促している（宮澤隆義「坂口安吾と象徴天皇制」『坂口安吾研究』第3号、2017年、34頁）ように、象徴と文学を結びつける議論は、制定に直にかかわった関係者の中にすでにあった。
- 4 大江健三郎「宗教的な想像力と文学的想像力」『鎖国してはならない』、2001年、講談社、17頁。初出：『新潮』第95巻第1号、1998年。大江が参照したショーレムのテキスト（英訳）の出典：Scholem, Gershom. “The Star of David: History of a Symbol” *The Messianic idea in judaism: and other essays on Jewish spirituality*. New York: Schocken Books; 1995.
- 5 同上。以下引用部の下線は特記のない限り引用者による。
- 6 大江は80年代以降ダンテ『神曲』やユダヤ教神秘主義の中の一度危機を潜り抜けたのちにある再生のモチーフに注目してきた。象徴を論じるには多くの文献があるものの、ここでショーレムを引き、かつ象徴の中でも特に「ダヴィデの星」を念頭において思索を進めるのは大江の

そうした関心ゆえと思われる。

- 7 ここには無論、アジア・太平洋戦争における責任が問われずに存続する天皇制への批判的視点を読み取れる。
- 8 以下、『宙返り』に言及したり、そこから引用したりする際、出典は初出の講談社版とする。引用については末尾の [] 内に上下巻の別と頁数のみ記す。なお、末尾以外の [] 内の記述は引用者の註である。
- 9 以下の記述を根拠としている。「自分らがめざすべきなのは、これこそが、苦しみと死によって自分らの時代に聖なるものとなったサインだといえる、シンボルを探すことだ。これが自分らの生命と再建の道を照らしたすものだと、それをかざしてゆくんだと……」[上、300]
- 10 第5節の引用部 [上、368] を根拠としている。
- 11 たとえば藤吉雅春「大江健三郎「僕が『宙返り』に込めた"新しい日本人"へのメッセージ」『週刊現代』第41巻第31号、1999年8月、42頁。なおこれは大江健三郎へのインタビュー記事である。
- 12 大江健三郎「宗教的な想像力と文学的想像力」、前掲、23-24頁。
- 13 尾崎真理子「大江健三郎の「宙返り」＝転向」『中央公論』第114巻第8号、1999年、289頁。
- 14 奥野政元『『宙返り』を読む』『キリスト教文学研究』第17号、2000年、46-53頁。
- 15 たとえば川口隆行「「セヴンティーン」・「政治少年死す」論 「純粹天皇」の考古学」『国文学攷』第153号、1997年、33-44頁、渡部直己『不敬文学論序説』、批評空間叢書、1999年がある。近年では、服部訓和「「あの人」を問うこと 大江健三郎「みづから我が涙をぬぐいたまう日」」『日本語と日本文学』第48号、2009年、34-48頁。村上克尚「ファシズムに抵抗する語り：大江健三郎「セヴンティーン」における動物的他者の声」『昭和文学研究』第67号、2013年、39-50頁が挙げられる。
- 16 栗原丈和「大江健三郎『燃えあがる緑の木』について：1989～90年の天皇代替わり儀式との関連から」『渾沌（近畿大学大学院文芸学研究科紀要）』第17号、2020年、29-49頁。
- 17 絳秀実「小説家・大江健三郎：その天皇制と戦後民主主義」『群像』第75巻第3号、2020年、115頁。
- 18 スーザン・A.ハンデルマンは、ヴァルター・ベンヤミンとショーレムに共通した言語観を「言語の源泉は神にあり、言語とは神的なもの与人間的なものとの交差点である」（合田正人他訳『救済の解釈学——ベンヤミン、ショーレム、レヴィナス』、法政大学出版局、2005年、156頁）とまとめている。
- 19 大江健三郎『人生の習慣』、岩波書店、1992年には80年代にこの題で行った講演が収録されている。なお80年代から90年代にかけて何度か同様のテーマにつき講演を行っている。
- 20 註4に同じ、22-23頁。

- 21 セーレン・キルケゴール、大谷愛人訳『キルケゴール著作集第6巻』、白水社、1963年。なお、その読解に際しては小野雄介「キルケゴール哲学における反復の問題」『茨城大学人文科学研究』第2号、2011年、19-41頁を参考にした。
- 22 なお、ショーレムは註4で参照した文献において、大江が引いている箇所の中に象徴の役割に言及し、それが世界の見方を一挙に開示するさまを「雷のような啓示によって [引用者註：原文は *by lightning-like illumination*]」(258頁)と表現しており、こうした電気にかかわる表現が象徴の機能と関連して生まれてきている可能性はある。
- 23 本作の下敷きとなっているのは、サバタイ・ツヴィという自称メシアの棄教事件である。ショーレムによればツヴィに伴走していた預言者ナータンはルーリアのカパラーの考え方をもとにしてツヴィ棄教をむしろメシアとしての役割の忠実な遂行として捉えた(ゲルショム・ショーレム、石丸昭二訳『サバタイ・ツヴィ伝：神秘のメシア 下』法政大学出版局、2009年、1007頁)。他方『宙返り』においてツヴィの棄教にあたる要素(「宙返り」)は第一義的にはメシアたることの否定と結びつく。こうした大江の見方は「宙返り」に際しての師匠の葛藤の描き出しの方向性にも反映されている。モデルとなったツヴィは手記を残していないため、棄教前後の内面的葛藤は推し量られえない。しかし大江はこれを神との接続不可能性についての師匠の葛藤として、すなわち師匠は結局メシアではなかったという線を重視して描いている。
- 24 「かれらは向こう側の声を自力で聞いたと言い張っている」[下、59]。
- 25 国立国会図書館—National Diet Library「資料と解説 3-1 天皇「人間宣言」、<https://www.ndl.go.jp/constitution/shiryo/03/056shoshi.html>、2022年5月10日最終閲覧。
- 26 島藺進「神聖天皇から象徴天皇へ——なお続く課題——」『論座』、朝日新聞社、2019年4月28日、<https://webronza.asahi.com/journalism/articles/2019042500004.html?page=2>、2022年5月10日最終閲覧。
- 27 平石直昭「現代日本の「ナショナリズム」——何が問われているのか——」『東京大学社会科学研究所紀要』第58巻第1号、2006年、25頁。
- 28 藤吉雅春、前掲、45頁。